



マーゴハンターレント

～陰謀潜む単独任務～

「え！？、わたし一人で任務、ですか？」

いつものようにアイシャ宅にて3人で囲む夕飯の後、レントはアイシャから単独で任務を行うように言われ指令書を渡される。

「んー、そーなのよ。」

「えっと…、なんでつてのは聞いていいですかね？」

「んー、なんかね、クラス3が多すぎるんだって。」

突拍子もない指令に困惑するレント、困惑しつつもどこことなくやる気に欠ける雰囲気、アイシャに説明をお願いすると…。

マーゴハンターは現在5クラス、
+1の6階級となっている。

+1に関しては極めて特殊なカテゴリなので
今回の話とは関係ないが、
残りの5クラスに関してある問題が起きているという。

それはクラス3の人数が圧倒的に多くなってしまう、
という事なのである。

全てのマーゴハンターはクラス1から始めるのだが、
クラス2に上がる時には試験などは必要なく、
研修と座学を履修するだけでクラス2へと昇格出来る。

そしてクラス2ではある程度実戦経験を積み
クラス3へ昇れる。

しかしクラス4に関しては
ある程度の戦闘力が認められなければ昇格できないのだ。

実はクラス5とクラス4の差は負う責任の多さや
立場が違うだけで
単独でマーゴを倒せる戦闘力という意味では
殆ど変わらない。

それ故にクラス4に昇格する為の条件が
非常に厳しくなってしまう、
多くのマーゴハンターが
クラス3に留まる事になってしまっているのだ。

この事にアダムンティウス・リベラティオのある幹部が
クラスの人数を正しくピラミッド状にすべきだ
と問題提起をした事が今回の話の発端となる。

だが急に能力の査定なくクラスを弄る事は出来ない為、
クラス3を分割し新しいクラスを作る案が出される。

そこで今回その査定の為、
ある程度実力の認められた

クラス3のマーゴハンター全員に特別試験として
単独任務を行わせるという事になったというのだという。

「はくなるほど、理由はなんとなく分かりましたけど、
先輩はなんでそんな不機嫌なんですか？」

「あたりまえじゃん、クラスはピラミッドじゃなきゃ嫌だとか、
昇格ザルにしたのは自分らのクセに我儘を言うなつて話じゃん。
しかもクラス3を3つに分けたいとか
訳わからん事言い出して、」

「だつたらあたし達をクラス6でも7にでもしたらいいじゃない。
カルミア！もう一杯ストレート頂戴！」

「はいはい。」

苦笑気味に受け取ったアイシャのグラスに
お酒を注ぐカルミア。

レントに指令書を渡して直後から

憤懣やるかた無いのか
いつもより強めのお酒を飲み始めるアイシャ、

因みに現在4杯目である。

「いやまあ、認めて貰っているのなら嬉しいですし、受けて立ちますけど、先輩納得いつてないんですね？、もしかして私にはまだ早いんですか？」

「強さだけでいうなら問題ないと思ってるよ、でも単独任務で一番危ないのは中級以上のマーゴに遭遇した時なのよ。」

中級以上のマーゴ相手だと戦闘力だけじゃどうにもならない時があるの。そういうのは場数がものを言うんだけど、レンはまだまだそれがちよつと足りてない。でもその部分に関してはあたしにも育成計画があるのよ。」

「そうなんですネ、
…あ、先輩、この指令書ですけど、先輩の名前も入ってますね。」

アイシャの話聞き指令書に目を落としたレントがある事に気付く。

単独任務ではクラス5でも完全に1人という事は少なく、大半はサポートしてくれる人達がいるのだが、レントはそのメンバー表の中にアイシャの名前を発見したのだ。

「いきなりホントに1人で出すヤツがいるかよ、
後詰めメンバーくらい自由にさせろって言ったんだよ。」

「じゃあわたしとしては心強いんで、

…うん、頑張ります！」

日々アイシャの傍にいと、結構色々な理不尽が起きるもそれに向かい解決していく師匠の姿を見ているレントとしては、最近色々と思う事もあったので弟子としてこのくらいの理不尽跳ねのけてやろう、そんな気概でこの任務に挑む事を決めたのだった。

「1週間後」

「よし、2体目、どちらも下級……」

とある地下水路を歩くレント、
単独任務だが、いきなり危険度の高い所に送られるはずもなく、
侵入していくらか進んでも遭遇するのは下級マールゴだけだった。

「正直、ちよつと楽すぎるなく、
まあ先輩が選んだ場所じゃないから
油断はしないけど」

ルミアさんに言われた事もあるし……」

「レンちゃん、その任務、いつもより警戒した方がいいかもしれませんよ。」

1週間前アイシヤが先に寝てしまった後、カルミアがレントにそんな事を言ってきた。

例の指令、最初は完全単独、後詰すら無しという無茶苦茶な指令だったらしく、それを見た2人は文句を言い、件の幹部の元に行ったそうなのだ。

しかし、幹部の態度は居丈高で、典型的な人の話を聞けないタイプで、埒が明かない状況だったのだが、

「弟子を人質に取られる師匠の文句など...。という二言でカルミアも久しぶりに見たというくらいアイシヤが大激怒したらしい。」

最終的にアイシヤ達に理解のある別の幹部が仲裁に入って一応その場は収まったのだが、

その時には室内にあった高級機のいくつか溶けたり炭になっていたり、細かい細工が施されていた絨毯がただの黒いマットになっていたという。

(ほんと先輩は優しいよね。)

アイシヤのした事を思い出しにやけ顔になるも、
頬を軽く叩いて気を引き締めるレント。

問題はアイシヤが弟子の為に激怒した事ではなく、
その幹部が

アイシヤの弟子が人質に取られた事を知っていた。
事なのである。

以前レントが
マーゴに人質に取られた事件があつたのだが、

本来外部への情報規制が厳しいマーゴハンターの
更に漏れてはいけない
個人情報が漏れていた事もあり、
アダマンティウス・リベラティオの内部の人間が
情報を漏らしている可能性が高いとして、

本来に一部の人間以外
この事件の情報は秘匿された状態で
捜査されているはずで、

この事は件の幹部は部署的に
知りえない筈の事だったのだ。

その場では確たる証拠も無いので問い詰められず、勿論直後に捜査している者に報告もしているが、今日の任務日を迎えてしまった。

実はその幹部の元には今回の特別任務に難色を示した複数の弟子を抱える師匠達が訪れたらしいのだが、部屋が大変な事になったのはアイシヤだけだったらしく、逆恨みから何かしら妨害の可能性に注意して欲しいというカルミアからの忠言があったのだ。

あの人質事件でレントは自分がとんでもない失態を犯したと、思っていた。

直後にアイシヤに、巻き込んでごめん。と謝罪されたのだが、どう考えても自分の弱さが原因なのに、何の非の無いアイシヤが頭を下げる姿を思い出すと、今でも悔じさと怒りが噴き上がってくる。

それを仕掛けたかもしれない奴が、また自分達に何かしようとしている、

――絶対この任務は、絶対に絶対に無事に終わらせてやる！
そんないつも以上の気合で道を進んでいくと、少し開けた場所に出た。

その場所の確認をしていると突然床が揺れ始め、レントが入って来た通路の前の床にヒビが入り、何かが地面から姿を現す。

「ん？、お前だれ？。」

現れたのは二見して分かる程に異様なオーラを纏ったマールゴだった。

(うそでしょー?!いくらなんでも。)

マールゴの触手が高速で打ち出され、それを回避したレントがいた場所に大きな穴が空く。

正直レントは何か起こったとしても中級マールゴがいる位だろうと思っていた。しかし目の前にいるマールゴは分かりやすい程の上級で、しかも何の会話もしていないレントにいきなり攻撃を仕掛けてきた。

上級マールゴには大きく分けて自身の力を隠すタイプとそうしないタイプがあり、後者の場合、気性も荒い事が多い為、事前の調査で発見出来ない事の方が少なく、絶対に報告が挙がらなければおかしいのだが…。

(嫌がらせの度を越えてるだろ!、しかも通信切れてるし!!。)

状況を精査する、周りを確認しどうするべきか考えて動く、いつもアイシャから教えてもらっている事を思い出し、激しくなった動悸を独特な呼吸で落ち着かせる。

「生きのいいごはんだな。」

(会話は無理、1人で挑むべきじゃない、ここは突つ込むふりして撤退二択!!。)

通信が突然切れたのは何かの妨害だろう、ならば単独で挑むべきでは無い相手への対応をどうするか。レントは身体から遠隔操作アニマウェポン、ランゲアを展開し、出口を塞ぐマールゴへと一直線に突つ込んで行く。



「ふっ!!」

レントは腰に携行していた銃型サブアニマを触手に撃ち込む。

今回は不測の事態に備え、いつもよりも装備を多くしてきた、この銃もその二つだがどうにも銃弾は効果が無いようだった。

（ならっ!!）

効果が無い銃をマールゴに投げつける、すると銃が爆発し強烈な閃光を撒き散らす、銃は弾切れの後にはフラッシュグレネードとして使えるが、残弾が誘爆してダブルの爆発効果を生み出した、

「ぎゃっ!!」

（今だっ!!）

爆発に怯んだマールゴの触手が痙攣し動きを止める、その瞬間を逃さずレントは短剣イドラケアを構えつつ数機のランゲアを放ち出口を塞ぐ触手に向かわせるが……

「あっ!!」

ランゲアが触手に激突しようとする瞬間、平べったい薄い触手が中ほどから割け、まるで口のようになりアニマウエボン飲み込もうとする。レントは咄嗟にランゲアを引かせようとしたが、何故かアニマウエボンが反応せず、そのまま飲み込まれてしまう、そして……

「じまつ!!」

ぐっ!!

あああっ!!」



「かはっ……ぐっ」。

ギッ
ギッ



ヒキ

✓η ✓η



ちゅーぱちゅーぱ

ランゲアの挙動の異常に動揺してしまったレントはその隙を突かれてしまい、マールゴの触手に捕らわれる。

触手はそれまでの粗暴さに見合わぬ匠さでレントを捕らえるとそのままに玩具のように地面や柱に何度も叩きつけ、触手の殴打を浴びせる、その威力はマールゴハンターのバリアで全て打ち消せない程に強力で瞬く間にレントのアーマールや戦闘着は破壊されボロボロにされてしまった。

（う……これ……あ……感覚は、ある。）

暴力の嵐を耐えたレントは、マールゴが手を休めた隙に状況を確認する。

まずは触手に包まれ無くなっているように見える左腕と左足の感覚を確認、

自分の手足がランゲア同様触手の裂け目に飲まれた瞬間、

レントは手足が無くなる事を覚悟したが、完全に喰われたように見える手足は内部に存在し、感覚も失われていなかった。

（ランゲア達とも切れてない、もしかして、いけるか？。）

実は最近、ランゲアの動きが思い通りにいかない時があり、今回それが裏目に出てしまっただけに、アニマウェポンとの感覚が切れている事を心配したがランゲアとのリンクは切れていない。そこでレントは一縷の望みをかけた反撃を試みる。

「おっ？、なんかしてんのか？、無駄だ、無駄だ。」

「くっ…。」

アニメマウエポン達は破壊エネルギーを撒き散らしながら触手内部で暴れさせたのだが、マリーゴには通用しなかった。



「へっへっへ、スパイスってやつか、おまえいい味だぞ。」

「ん、つなわないでしょ、つくっ…。」

「生意気なのはいいが、ちよつと生きが良すぎだなあ。」

一縷の望みが通用しないからといってレントに諦める選択肢はない、藻掻き暴れ続けるレントを嘲笑う様にマリーゴは胸に巻きつく舌の締め付けを強くするとレントは痛みで呻き声をあげるがそれでも抵抗をやめようとしないう。そんな生きが良すぎる獲物にマリーゴは口の中から小さな物体を吐き出す。

それは小さなクラゲのように宙にフワフワと浮かんでいたが突如レントの下腹部へと突っ込んでいく。



「グッグッグッ」

グッ

グッ

グッ

グッ

グッ

グッ

グッ

グッ



小さな物体は勢いよくレントの下腹部へと直進したがぶつかる瞬間に、バチっ！
という激しい音と共に弾かれる。

「お？、なんだ、お前、もうハンコ押されちまってるのか？」

レントの下腹部で不思議な紋様が浮かび上がるがすぐにその輝きは薄らいでいく。

この紋は以前の任務でマーゴに捕らわれ刻まれてしまったもので、淫紋とは違う効果があるのだが、どうやらそれはマーゴが吐き出したものとは相性が悪かったようだ。

「じよーがね、じゃあいつもどーりこっちなな。」



「んきやうつー！」

ギョッ
ギョッ

ギョッ
ギョッ

ギョッ
ギョッ

ギョッ
ギョッ
ギョッ

ギョッ
ギョッ

ギョッ
ギョッ
ギョッ



「うわーっ」

「うわーっ」

「うわーっ」

「うわーっ」

「うわーっ」

「うわーっ」



ちゅぽ

ズル

ズル

「きやふう！ な、で… んんっ！」

レントの陰核全体を這い回るもの

クラークーン。

それは上級マールゴ、ボラスグーラの最強の武器である。

僅か数センチのクラゲのようなそれにマールゴハンターを傷つけられる力はない。だがボラスグーラの上級マールゴとしての特殊能力が練り込まれたクラークーンは半物質となっており物理的に触れる事が出来ない、しかしクラークーンは触れる事が出来るのだ。

その特異性故、生成に数日かかる上に保有できるのは1体分だけという条件があるが、

その能力でボラスグーラはクラークーンを敵の体の中に侵入させ内臓や脳を破壊したり、今のよう性感の泣き所の本来触れる事が出来ない部分にも取り付き鬨る等の戦法を好んで使う。

当然クラークーン自体には淫気が多量に織り交ぜられているので敏感な部分に取り付かれ続けければ今のレントのようになり、痛みの電流が甘美な稲妻へとすり替わっていくのは必定だった。

「はははは、おめえの踊りおもしろえなあ、
マールゴハンタールでもやっぱり女はここを押さえつけるのが一番だな。」

全身から汗を滴らせ無様なダンスを踊るマールゴハンタールを楽しそうに
眺めるボラスグーラの帯触手の数本が二つにまとまってゆくと
歪んだボールのようなものを携えた太い触手が生まれる。

「あうっ、はぐあっ！、んきゅ…っ ふぐ…はきゅん！♡。」

触手ボールは別の触手がスパッツ状の戦闘着の中で弄んでいた
彼女の入り口を開くとそこにグイっ！と強くあてがわれる。

「じゃあこっこのはどうだい。」

別方向からの刺激に思わず可愛らしい声を上げてしまうレント、
直後、触手ボールがヴヴヴヴッという低い唸りを上げ振動を始めた。

「ハア、ハア、ハア……ッあー！、はああああ……んっ！。やっ……もうとめっ……んくああああん♡♡♡♡♡」

望まぬ絶頂の屈辱に震えるレント、しかし彼女の体を芯から震わす甘美な振動が止むことは無く、荒い息を整える事もままならないままに次の嬌声を唄わされてしまう。



「はひっ♡!、
ふぁあっ♡♡
ひゃぁあぁっ♡♡♡!」
やっめろっ、
やっ、
イ、く、
ひゃめ

(なんとかしないと、あうああっ♡♡♡!)
こ、こんなの続けられ、たら、んひいい♡♡♡!。)

レントの体が激しく仰け反り、制御不能の痙攣に包まれる。



ボラスグーラは振動クリ責めの最中レントの味見の為に彼女の体中に舌を這わせた。その最中レントが幾度絶頂しようが全身を痺れさせる振動とクリへの責めは一切休む事無く行われ、品定めが終わるまで激しい絶頂に幾度も晒されたレントは息も絶え絶えで、責めから一旦解放されても勝手に体がビクビクと痙攣してしまふ。

「おめえの体、うめえなあ、久しぶりの上物だ、たっぷり食わしてもらおうぜ。」

レントの味を気に入ったらしいボラスグーラの触手は彼女の手足を更に飲み込み始め、手の空いていた触手も加わりレントの身体を縛り上げていく。

そして少し色の違う触手が二本現れるとその内部からボラスグーラの舌のような太い触手が複数出現しレントの秘所へと群がっていく。



「おかえりー、

えっ?、 ええっ!?!、 どうしたのその恰好!?!。」

地上に出て出迎えてくれたアイシャだったが、
レントの姿を見て驚きの声を上げる。

レントの状況説明を聞いたアイシャは、
その間、そんな顔見た事が無いとレントが思うほどに
血の気の引いた顔をしていたが、

レントの話聞き終えると
直ぐに別のスタッフの元へ行き、
何やら機材の横のカバーを外したりした後、自分の
通信端末を取り出すと。

「緊急回線使つてごめん、うちの子が上級と遭遇した、
通信に細工されてる、全員直ぐに自分の子の所に行つて。」

という通信を行った後、数人の隊員を連れて
レントが上級マーゴと遭遇した地点へと
向かっていった。

「お帰りなさい先輩、あの、後始末させてすみません。」

30分程して帰ってきたアイシャを一旦落ち着いて身なりを整えたレントが出迎え謝罪する。

結局アイシャに自分の仕事の尻ぬぐいさせてしまったと思うとついそんな言葉が出てしまったのだ。

「謝る事なんてないよ、少しは落ち着いた?。」

「はい、なんとか。」

「所であんたあのマーゴに何したの?。」

「へ?。」

アイシャが言うにはレントが眠らせたマーゴは既に死んでいたという。

普通マーゴハンターの力で死ぬとマーゴの体は消滅するのだが、姿形を保ったままだったので十分警戒しつつその場の機材で調べてみると、マーゴはおそらく衰弱死に似た状態だったという。

だが何をしたと言われてもレントはただ必死だったしか言いようが無かったのだが。

「え、途中から通信切れましたけど!?!」

その後の事後処理で判明したのだが、通信機器に細工がされていて、レントがアイシャ達と通信が切れた後もノイズ交じりの声ではあったものの、定時連絡は行われていたらしいのだ。

「は〜ドツペル的なわたしがいいたんですね。」

「ノイズなんてよく入るけど、せめてあたしが通信に出るべきだったね、…ちよつと用心が足らんかった、わるい。」

「いやそんな…でもなんかあれですね、…は〜もうちよつと頑張つてもよかったかな〜。」

「ん?なにがよ。」

「罣はありましたけど、もしかしたら、もう少し頑張つてたら先輩の手を煩わせずに上級マ―ゴをたおつ、あいたつ!!」

アイシャの表情がちよつと暗くなりそうだったのを敏感に察知したレントはちよつと話題を変えようと喋つてゐる途中でレントのおでこにアイシャのデコピンが炸裂する。

「バカな事言つてないの、成熟した上級は本当に危ないの、あの外観だと確実に戦闘経験も多かっただろうから、今回は無事でよかったけど、たんだよ、本当に凄いい運が良かったんだけど、のは覚えておきなさい。」

「…はい。」

圧倒的な力でねじ伏せられ犯された事を
忘れたわけではないが、
安全な場所ではないが、
アイシャの横にいる事で
つい気が緩んでしまったのを
注意されシユンとなるレント。

「でも優先順位と目的を見失わず帰ってきたのは良かったね、
今回はかなり悪い状況だったけど、
仕事としては満点上げてもいいくらいだったよ。」

「ほんとですか！、わーいやったー！」

折角大変な仕事をこなしてきたのに
苦言だけで終えるのは
アイシャの教育方針に反する、
なのできちんと褒める所を褒めたのだが、
数秒前のシユンとした顔は何だったのか？。

と一瞬思ったものの、
最近色々あってかちょっと心配になるくらい
任務直前まで
緊張していたレントをアイシャも見ているし

今の会話もちょっと強引だけど同じく
最近良くない失敗が多い
至らぬ師匠をフォローしてくれた
弟子の優しさだと分かるだけに、
これ以上自分が思い詰めても格好悪いだけだ。

なのでアイシャも
弟子に倣って多少強引でもいつもの調子で、

「ふふ、まったく…調子に乗るんじゃないの！」

ツツコミを返してあげる事にした。

その後、アイシャの緊急通信を受けた師匠達は即座に動き、案の定罨や細工の類はあったものの、幸い大きな怪我人等を出す事無く今回の特別任務は緊急終了となった。

中には中級マーゴと遭遇したという報告もあったが、上級マーゴと遭遇してしまったのはレントだけだったという。

実はクラス3でしかも単身で上級マーゴを討伐したという例はごくわずかしかなかった。

この噂は後日広まり、レントが周りから一目置かれるようになるのだが、

実はそれはとある宴会の席で酔った勢いで自慢げに語ってしまった彼女の師匠が原因だったりするのだがそれはまた別の話である。

「そうだレン、明日の夜はあたし達予定があるから。」

「ああ、師匠会でしたっけ。」

「その名前かつこ悪くない？大したものじゃないのに、まあ最近色々あったからねえ、情報交換はしとかないと。」

その後、複数の師弟を巻き込んだ今回の事件の首謀者は件の幹部だったと判明する。

彼は自分に盾突いたマーゴハンターの任務地を細工し妨害するように工作していたという。

そして今回の件で捕らえた彼の手足として働いていた者達への捜査、尋問から、彼がアダマンティウス・リベラティオの一部の内部情報を売買していた証拠を掴む事ができたという。

今回の事件と更に芋づる式に暴かれた数々の余罪を鑑み、アダマンティウス・リベラティオは彼の幹部の地位を剥奪、不当に稼いだ資産と財産の没収とアダマンティウス・リベラティオ管轄外への追放処分という極めて厳しい処罰が下ったのだった。

「流石師匠って大変そうですね。」

「まあ多少はね、でも明日のは多分軽く情報交換して、あとは宴会だよきつと。」

「いいな、じゃあ楽しんできてくださいね、わたしは友達でも誘ってご飯いつてきますので。」

——実はこの日の深夜、
とても不思議な事件が起こったという。——

たまたまその日は元幹部の男の一家が
屋敷から出ていく日だったのだが、
彼の屋敷で大きな爆発事故が起きたという。

被害規模はかなりのもので
屋敷は全壊だったのだが、
幸い元幹部も含め
怪我人は一人もいなかったという。

余程の事故だったのだろう、発見された彼は
茫然自失の状態で救助されるのだが、
そこで何があったのか聞かれると酷く怯え始め、
意味不明な言葉を叫び始めたかと思うと
家族を連れ逃げるように
その場から立ち去ってしまう。

事故を目撃したのは彼らだけで、
他に目撃者もいなかった為、
結局事故当時の詳しい事情等が
分からないままになってしまったのだった。

その後、行われた解体作業で、事故前の状態を知っていた作業員がある事に気付く。

その屋敷には男が集めていた高級車や、クラシックカーが沢山あった筈なのだが、それが1台も無くなっていたのだ。

爆発に巻き込まれたならば破片があるはずなのだが、それが一か所にも存在しない事から、爆破事故から今日までの間に、全て盗まれた可能性があると作業員が一旦中断する事態にまでなるのだが、盗まれた形跡も無くその後も裏市場等にも流れている痕跡も無かった為、この事件は最終的に不明事件になってしまったという。

そして様々な不足の事態がありながらも無事工事も終わり更地になったその場所ですら、しばらくの間、放置され続けた場所があった。

それは屋敷の庭にあった大きなプールなのだが、その内部が水ではなく謎の金属のような物で満たされていたのだ。調べるとそれはプールの底を貫き、かなりの深さまで及び、まるで木の根のようになっていた為に、撤去するには大規模工事が必要という事になり、かなりの期間放置される事になるのだった。

その金属プールは一部ネットで噂になり、

それに目を付けたある動画投稿者がその金属を無許可に採取し調べるといふ趣旨の動画があったらしい、

その動画によるとプール内の物質には金属以外にもゴムやガソリンの成分が検出されたと言っており、

投稿者は屋敷にあったと噂された数々の車が溶かされそれがプールに流されたのでは？という仮説を提言する、

そして、そんな事が常識的に可能なのか？。

から現代に炎の魔人やドラゴンが現れこの件はそいつらの仕業なのだとトンデモ自論を展開して終わるという動画だったというが、

現在は削除されている。

その後この動画はネット上に一度上げられたにも拘わらず、切り抜きを含めた痕跡の一切が無い幻の動画として、都市伝説のネタとして広められたのだが、

真相を探ろうと件の金属のプールがあった場所に訪れる者が増え始めた頃にはそこにはすでに新しい大きな建物が立っており、

あの金属がどうなったのか？、

今も撤去されずにあるのでは等の

噂を生むも、

真相は今も分かっていないという…。

ボラスグーラ

上級マーゴ。

巨大な角と固い外殻を持ち角から振動を発し普段は地底に潜伏している。

触手は薄く細目だが、その内部は特殊な空間を持つ口となっている。
その口の中は防御力が高くマーゴハンターの力でも破壊は難しい。
そこで咀嚼し無力化したものを胃に運び消化する。

クラークーンという数cm大にクラゲのようなものを生み出す能力を持つ。
このコクニンは半物質で物理的に触れる事が出来ないがコクニンからは触れる事が出来る。
その能力で敵の体の重要部位を破壊したりする等、扱い方次第で非常に強力な力を発揮する。

男性的性格を持つ上級マーゴの中でも大雑把な性格で気に入らないものは破壊し殺せばいいし、歯向かう女はコクニンで敏感な部分をいたぶって馴れればいいと思っており、深く物事は考えないが、それに反するように戦闘力や淫気の使い方、快楽責め等の技術が非常に高い。

